

「藤樹紙芝居」の紹介⑥

『大野了佐を教える』

(解説)

この話は、藤樹先生年譜、行状伝聞に記されている実話に基づいて描きました。

大野了佐は、藤樹の大洲時代の親しい友人、大野勝介の嫡男でしたが、知的能力が乏しいため、父は、侍の跡継ぎを認めませんでした。その了佐がなりたいたと考えた仕事は、医者でした。「藤樹先生に医学を習いたい」と、心に決め、頼みにいきました。

先生が、数年間、了佐を教えて判ったことは、能力の低さと格別の粘り強い性格でした。大洲における了佐の学問は、藤樹先生の脱藩で途絶えました。しかし、その後も四年間、父に頼み続けて、近江の小川村への留学が実現しました。

能力の高低で、人を差別しない先生の教育方針と、長所を最大に生かす教育法のお陰で、了佐は三年後、医者としての力を付けることができました。先生は喘息を患い、又、多忙な生活の中で、了佐に精根尽きるような力を注ぎ、ついに立派な医者を育てたのです。

心を砕いて教えた先生、応えて一心に努力した了佐の姿は、後世の多くの人々、子供にも大人にも、大き



大野了佐を教える (紙芝居)

な感動を与え続けているように思います。

① ここは、伊予の国大洲藩、二百石(年俸一千万円位)どりの大野家です。了佐は、父の部屋に呼ばれました。

了佐「父上、何のご用ですか。」
父「大事な話がある。了佐、お前は、生まれつき、字を覚えたり、理解したりすることが苦手である。武士のあとつぎとして、つとめるのは無理だ。自分に合う仕事を、何か考えなさい。」

しばらくして、うつむいて考えていた了佐は、顔を上げました。
了佐「：私は、やりたい仕事の一つだけあります。」
父「どんな仕事か、言ってみよ。」
了佐「それは、医者です。病気で苦しむ人を治し、みんなに喜んでもらえるよい仕事です。」

父「何じゃと、覚えることの苦手な了佐には無理じゃ。」
了佐「私は、石にかじりついてでも、がんばります。」
父「医者になるには、人一倍学問をしなければならん。第一、大洲には医学を教える先生もいない。考え直すのじゃ。」

了佐「父上は、『無理じゃ』と言われたが、私はどうしても医者にな



右衛門先生に、医学書の読み方を教えてもらおう。

了佐はさつそく先生の家へ行きました。

先生「どんな用かな。」
了佐「先生、さつそくですが、私も医学書の読み方を教えてくださいます。父は、私に武士のあとつぎをゆるしてくれません。しかし、私には、医者になり、人の役に立ちたいという夢があるのです。どうか、お願いします。」

先生は、必死に頼む了佐のことを、気の毒に思つて、承知しました。
③ さつそく、了佐は喜んで先生の所へ勉強に來ました。先生は、最初に『医方大成論』という医学の入門書を教えました。たった二つか三つの言葉を朝から夕方まで、くり返しくり返し二百ぺんも読ませてようやく覚えられます。



先生「了佐、夕食をすませなさい。その後、続きをやるう。」

了佐「はい。分かりました。」

夕食をすませて、続きの勉強をしました。

先生「了佐、先ほど勉強した言葉を言いなさい。」
了佐「はい。えーっと、えーっと、出てきません。思い出せません。」
先生「そうか。まだ、勉強が足りないと思える。最初から、もう百回読んで覚えなさい。」

こんな調子なので、了佐の勉強は、他の若者たちと違ってなかなか進みませんでした。
数年が過ぎ去ったある日、先生は了佐に言いました。
先生「私には、事情ができて、了佐に医学を教えることができなくなりました。これまでに付けた力で、なんとか一人でやりなさい。」

了佐「そうですか。先生、分かりました。読み方が少しづつ分かってきたので、やってみます。」
④ まもなく、先生は、近江で一人さびしく暮らしているお母さんと生活するため、大洲藩を脱藩したので。しかし、先生が近江に帰つてからの了佐は、医学書を一人で読むうとしても、漢字の読み方も意味もさっぱり分からず、困りました。



了佐「ああ、先生には、よく分かるように教えてもらえたので、少しづつ

は、よく分かるように教えてもらえたので、少しづつ